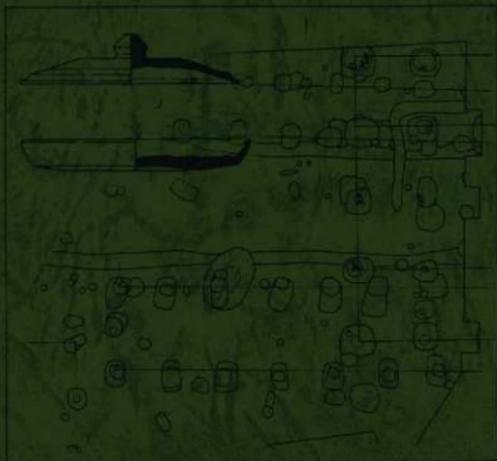


国衙跡保存整備基礎調査 概要報告書Ⅲ

寺崎遺跡第7次調査



1999.3

宮崎県教育委員会

序

本書は、日向国府・国衙跡の解明とその保存活用に向けての基礎資料を得るために実施している、国衙跡保存整備基礎調査の概要報告書です。

今年度も引き続き寺崎遺跡の確認調査を実施しましたが、中でもその中の1区画で、初めてまとまった面積の発掘調査を行うことができ、主要殿舎と見られる掘立柱建物が確認されるなど、国衙の遺構配置の解明が飛躍的に進展いたしました。

ここにまとめられた資料が、学校教育や生涯学習の場で幅広く活用され、文化財保護のための指針になることを切に願います。

なお、このような重要な成果を得ることができましたのも、妻北地区の地権者の皆様の多大なご協力のおかげであります。末尾ながらここに記して感謝申し上げます。

平成11年3月

宮崎県教育委員会

教育長 笹山竹義

凡 例

1. 本書は、宮崎県教育委員会が国庫補助を受けて実施した国衙跡保存整備基礎調査の概要報告書である。
2. 平成10年度の確認調査は、西都市大字右松字別田に所在する寺崎遺跡の4か所を対象に、平成10年7月6日から平成11年3月31日までの間実施した。
3. 本書の執筆・編集は、宮崎県教育委員会文化課埋蔵文化財係主査 吉本正典が担当した。
4. 調査にあたっては、調査指導委員会の委員や特別調査員の先生方にご指導をいただいた。
5. 諸記録における遺構の略称は以下の通りである。遺構番号は 西暦年下2桁+001…とする。
竪 = 竪穴住居、掘 = 掘立柱建物、墳 = 土墳、溝 = 溝状遺構、
構 = 構列、道 = 道路遺構、穴 = 柱穴、小穴

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第Ⅱ章 調査の成果	4
第1節 調査の概要	4
第2節 寺崎遺跡確認調査（第7次調査）の成果	5
第Ⅲ章 まとめ	10
図版	13

第I章 はじめに

第1節 調査の経緯と組織

1. 調査の経緯

日向国府の所在地については、「和名抄」その他の文献の記載や地名、古瓦の分析などから、いくつかの推定地が示されていたが、考古学的資料の蓄積がないため確定には至っておらず、都市化の進行に伴って遺跡の破壊が懸念される状況となってきた。

そのため、宮崎県教育委員会では国庫補助を受け、昭和63年度から平成2年まで国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査を、平成3年度から平成7年度まで国衙・郡衙・古寺等遺跡範囲確認調査を行った。

その結果、寺崎遺跡において、方形の柱形形の堀立柱建物や、幾内地方からの搬入品と見られる土師器杯蓋などが確認され、さらに平成7年度に実施した地下レーダー探査の結果、遺跡の南西部付近で直角に曲がる溝状遺構の反応が確認された。その一部は実際に検出され7世紀末～8世紀後半の須恵器、転用硯、凸面横方向縄目叩きの平瓦などの遺物が出上したことから、中心部の一郭を区画する施設と推測されている。

それらの調査成果を踏まえ、宮崎県教育委員会では平成8年度から5か年計画で国衙跡保存整備基礎調査に取りかかることになった。今年度は、寺崎遺跡内の4か所で確認調査を行った。うちA地区は、地権者のご協力を得て、当該調査では初めて「面的に」実施することができた。

2. 調査の組織

平成10年度の本調査の調査体制は以下の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 笹山竹義 教育次長 川崎浩康 教育次長 岩切正憲
文化課長 仲田俊彦 課長補佐 矢野 剛 主幹兼庶務係長 井上文弘
埋蔵文化財係長 北郷泰道 関係市町村教育委員会

指導監督 文化庁

調査指導委員会 小川富士雄（福岡大学人文部教授）
山中敏史（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長）
日高正晴（宮崎県文化財保護審議委員） 永井哲雄（宮崎県史編さん室顧問）
阿萬美水（元宮崎県立高校教諭）

調査員 古本正典（文化課埋蔵文化財係主査）

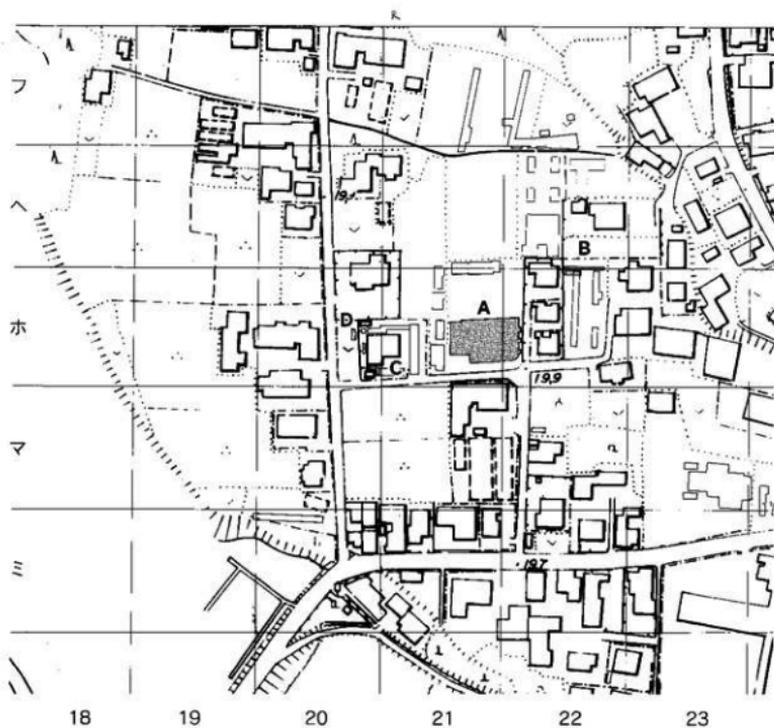
特別調査員 柳沢一男（宮崎大学教授）
口野尚志（佐賀大学教授）
永山修一（鹿児島ラサール高等学校教諭）
石松好雄（福岡県文化財保護課長）

表：国術跡等関連調査一覧（昭和63年度～平成10年度）

年次	調査	内 容	備 考・ 関 連 事 項
昭63	遺跡詳細分布調査	泉内分布調査 国分尼寺跡確認調査	布目瓦出土地 (西都市・佐土原町・宮崎市・えびの市・延岡市)
平元		分布調査(西都市) 国分寺跡確認調査 上尾筋遺跡確認調査	2×5間以上の建物跡「僧坊」? 下村窯跡試掘調査(佐土原町教育委員会)
			遺跡所在地確認調査(西都市教育委員会) (上尾筋遺跡・下尾筋遺跡)
平2			分布調査(佐土原町) 寺崎遺跡
平3	範囲確認調査	童子丸遺跡第1地点 童子丸遺跡第2地点 上妻遺跡	下村窯跡調査(佐土原町教育委員会)
平4		上妻遺跡A地点 上妻遺跡B地点	単弁8葉蓮華文軒丸瓦 石帯
平5		寺崎遺跡2次	
平6		寺崎遺跡3次	掘立柱建物跡
平7		寺崎遺跡4次 諏訪遺跡2次(国分尼寺跡推定)	溝状遺構
平8		寺崎遺跡5次	掘立柱建物跡
平9		寺崎遺跡6次	掘立柱建物か櫓列 溝状遺構
平10	保存整備 基礎調査	寺崎遺跡7次	掘立柱→礎石建物(正殿?) 東西棟長舎型建物2棟



第1図 遺跡位置図(1/25,000)



第2図 調査区位置図(1/2,500)

第II章 調査の成果

第I節 調査の概要

まず、昨年度に引き続いて、国衙域の範囲解明のためのトレンチを、寺崎遺跡内の3か所に設置した(第2図)。B区(へー22区)は北東限の確認、C・D区(ホー20区)は西限の確認を目的とした。

さらに面的調査を行ったA区(ホー21・22区)では、主要殿舎の検出に期待が持たれた。

基本層序は以下の通りである。(第3図参照)。

I層は表土・耕作土で、各時代の遺物を含む。

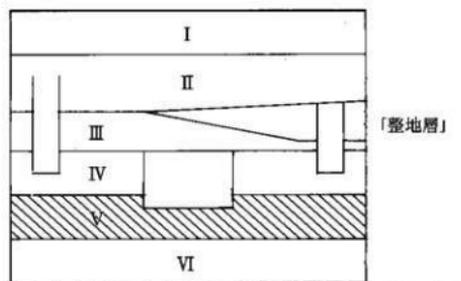
II層はやや灰色かかった褐色土で、土器の細片を多く含む。包含される遺物量が多い。

中世に形成された層で比較的大規模な整地の跡であろう。

III層は黒色土でやわらかい。この層の上部に黄白色粘土が混入している箇所があり、後述するように古代の遺構構築時の整地層と考えられる。III層自体は混入物がほとんどない。

IV層は赤橙色火山灰層で「アカホヤ層」と通称される。この層の上面で確認できる遺構(古代以前の遺構)もある。

V層は暗褐色土層、VI層は褐色土層でいずれもかたくなっている。今回の調査では細かくは追求していないが、これらの層には縄文時代早期の文化層が存在するようである。なお、本遺跡の基盤は段丘礫層で、浅いところでは表土下40~50cmであらわれる。



第3図 土層模式図

礫層に続く

第2節 第7次調査の成果

A. ホー21・22区の状況

調査区を設定した茶畑は、付近では最も標高の高い所である。

調査は、茶畑の南半分の約600m²を対象に実施した。

I層(表土)を除去後、II層以下について人力による掘り下げを行った。調査区の北東部を中心に、黒色土の中に黄色白粘土の混入する柱穴(柱痕跡部分のみ粘土が入るもの有り)、褐色を呈し、土器小破片を多量含む一群、灰褐色を呈する一群などが認められる。基本的には粘土の混入するものは古期にさかのぼると見られ、灰褐色を呈するものは、中世後期から近世に下ると判断できる。

前述のII層下位の整地層中から出土する遺物は少量であったが、一点のみ、須恵器の杯蓋の破片が見られた(1)。TK48並行(7世紀後半)の年代が与えられ、図に示した遺構群の中の、最も古期に属する一群の上限を示すものである。

確認できた掘立柱建物は以下の通りである。

掘98001は、2列の柱穴列が確認されたのみで全容は不明であるが、東側のブロック近くで検出された柱穴により、南北両面に庇の付く梁行4間の東西棟建物と推定している。最終的には礎石建てとなる(掘98001b)ようで、西側柱列の柱穴には根石が残っている。黄白色粘土で固めた基壇上に築かれていたようである。

柱間は桁行で2.85m(9.5尺)、梁行で3.0m(10尺)となる。柱穴掘り方はやや不整な方形を呈し、一辺長は1.0m~1.4mを測る。柱抜取穴に黄白色粘土を充填させるものが見られる。このように、これまでに検出された中では最も格式の高い建物であり、占地状況(最も標高が高い等)なども勘案すれば、正殿であるとの推定も成り立つであろう。

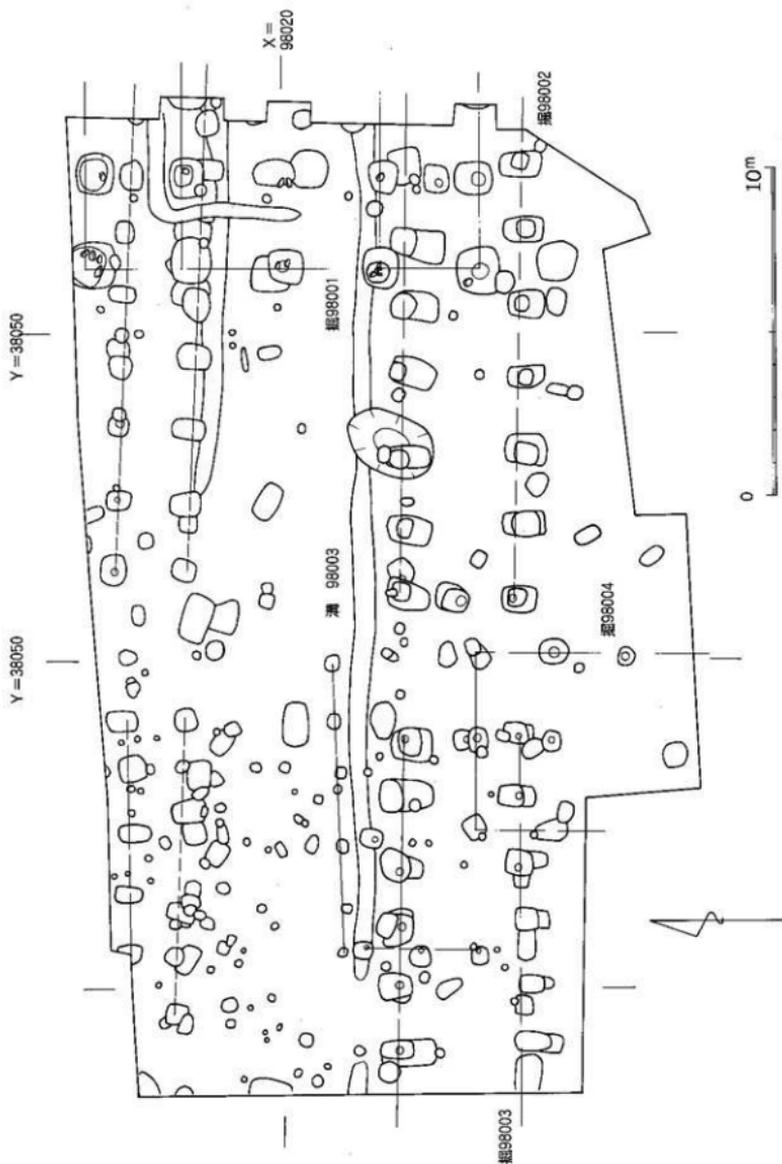
掘98002は、2次・3次調査で検出された掘94001と同一の建物の、東側の続きにあたる部分である。2間×10間以上の東西棟建物になると考えられる。柱間は既ね2.1m(7尺)等間となる。掘り方は長方形を呈し、長軸長1.2~1.3m、短軸長0.6~0.8mとなる。柱穴内の埋土中にはIV層(「アカホヤ層」)ブロックや小礫を多く含む。柱痕跡内には黄白色粘土が混入している。

掘98003は、掘98002の東側に続く、似た性格の建物である。柱筋もそろえている。柱穴掘り方の規模、柱間もほぼ同一である。掘98002、98003ともに、建て替えの痕跡が認められる。

掘98004では、柱穴掘方の埋土中に瓦が混入しているものが見られた。

以上の他にも、掘立柱建物と推定される柱穴の並びがいくつか認められる。

出土遺物は上師器を中心に多量に上る。古瓦は調査区中央部から南よりにかけての区域に集中する傾向が見られた。そのほとんどが平瓦である。丸瓦、熨斗瓦も少量認められた。なお、古瓦の総量は、コンテナケースで約10箱に上る。

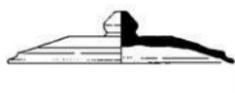


第4図 A (マ-21・22区) 遺構分析状況 (1/150)



1

1「整地層」出土

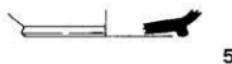


2



3

4



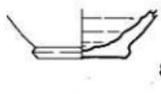
5



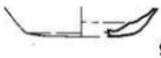
7



6



8



9



10

2~10 掘98001
掘方内出土

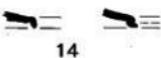


11

掘98002
掘方内出土

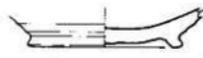


12



14

15



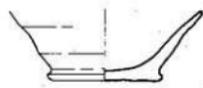
13

12・13 溝98003



16

14~16 溝98004



18

18・19 包含層中出土



17

17 北西柱穴内出土
墨書



19

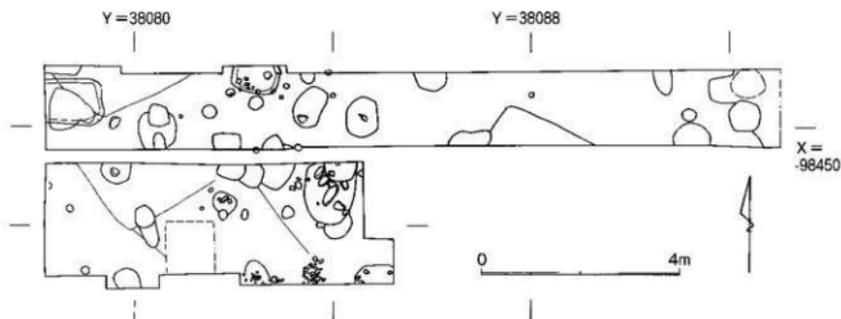


第5図 A(マー22・23区)出土遺物(1/3)

B. へ-22区 (第6図)

平成元年度に西都市教育委員会が調査を行った寺崎E地点のある畑地の北端にトレンチを設定した。I層より人力で掘り下げを行い、III層上面（地表下約50cmであらわる）での遺構検出・精査を進めていった。

調査の結果、古代に属すると見られる柱穴が検出されたが、そのつながりは解明できなかった。また期待された東限の施設も検出されなかった。

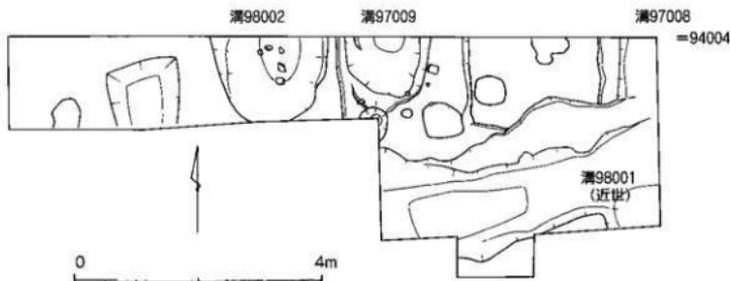


第6図 B (へ-22区) 遺構分布状況 (1/100)

C. ホ-20区 (第7図)

西限と見られる溝状遺構の確認のためにトレンチを設定した。

その結果、3次調査において東側の落ち際のみ確認された溝96004の西側をおさえることができた。第6次調査の溝98008と同一のものであろう。また、それに並行する形で走る溝97009の南の続きが確認できた。近世の溝(溝98001)に切られ、やや不明瞭となつてはいるが、おそらくこの溝98009は、この付近で終息するものと見られる。



第7図 C (ホ-20区) 遺構分布状況 (1/80)

D. ホー20区

第6次調査（平成9年度調査）のD区の西側に隣接するトレンチを設定した。第6次調査D区においては、前述の通り2本の並行する溝状遺構が検出された。

当調査区では、表土のI層を除去すると、基盤のIV層があらわれ、古代関連の文化層は存在しないことが判明した。そのため見るべき遺構はなく、遺物も他調査区と比べると少ない状況であった。

なお、この西側の南北方向の道路に並行して土塁があったとの伝承があり、このD区でその痕跡が捉えられるものと期待されたが、基底等、何ら見当たらなかった。

第三章 まとめ

本年度の確認調査では、これまで触れてきたように、いくつかの重要な成果が得られた。現段階では資料整理の途中であることから、ここでは現在把握している内容と今後に向けた見通しについて述べることにしたい。

検出遺構の中では、最終的に礎石建てとなる東西棟建物（掘98001）が特筆されよう。未だ全貌が判明しておらず、不確実な点も多いが、仮に4×5間の南北両面庇付き建物で、正殿に相当する建物であったとすれば、そこから南側にのびる道路が政庁中軸線の痕跡ということになろう。年代は、柱穴掘方内より出土した須恵器（2・3など）の年代観より9世紀初頭を中心とする辺りであろうが、礎石建物（掘98001b）の時期を含めて今少しの詰めを行わねばならない。

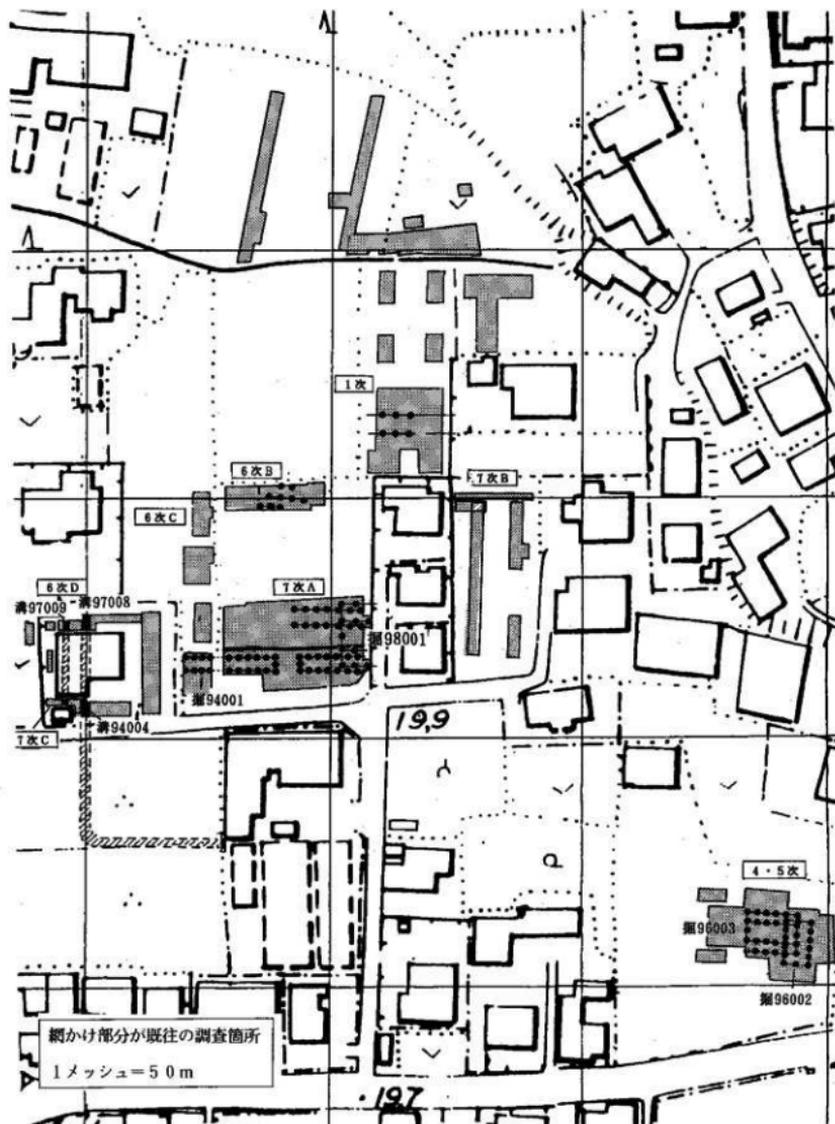
掘98002と98003は、長舎状の構造をとる建物で、桁方向の総長は21m程と見られる。その形態は、各地で検出されている郡庁の施設に類似しており、当初は郡衙であった（ないしは郡衙を併設していた）可能性も考えられよう。1次調査で検出された東西方向の柱状列が、それらと対になるものであるとすれば、その想定が補強されることになる。この遺構についても、遺物の少なきゆえに時期比定が難しいが、掘98001に切られること、掘98002の柱穴検出面近くより出土した須恵器の年代観より、8世紀後半の年代を与えておきたい。

掘98004は、掘98001を正殿と見なした場合、脇殿の位置にあたる建物とすることができようが、柱穴自体はやや小さく（一辺約50cm）、柱間も狭くなる（2.7m）点に疑問が残る。

調査区の北東側で検出された柱穴列は、建物跡になるのか、柵列になるのか、調査区内では判断できない。主軸が東に45°程度振れており、6次調査での柱穴列と主軸や埋土の特徴が似通っている。掘98001に切られており、掘98002・掘98003と掘98001の間の時期と考えられる。

以上のように、今回の調査では所期の目的であった主要殿舎の検出という点で成果が見られ、その配列についてもある程度の見通しをつけることができた。当遺跡は、既往の調査でその官衙的性格が指摘されていたが、今回の調査により日向国庁・国衙跡としての位置づけが可能になったと言える。無論、脇殿にあたる建物の本格的な検出や、区画施設の確認などの課題が残っており、その解明に向けてさらに調査を継続して行かねばならない。

尚、調査は本報告書製作時点でお継続中であり、使用した図は、1999年2月末段階のものであることを明記しておきたい。



第11図 寺崎遺跡全域遺構分布状況 (1/1000)



寺崎遺跡全景（上空南より）

(写真: 20050-20050)



A (ホ-21・22) 遺構検出状況 (北西より)



掘98002・98003 (北西より)



掘98001 (南より)



掘98001 検出作業状況 (北より)



掘98001 北側 柱穴列 (西より)



掘98001 柱穴半載状況 (南より)



C (ホ-20) 遺構検出状況 (東より)



D (ホ-20) 西側「土塁状高まり」と直線道路

報告書抄録

所収遺跡名	所在地		緯度	経度
寺崎遺跡	宮崎県西都市大字右松字剱田		北緯32°6'40"	東経131°24'10"
調査期間	調査面積	調査原因	種別	主な時代
97.7.6~98.3.31	650m ²	史跡整備関連	官衙遺跡・集落	古代・中世
主な遺構		主な遺物		特記事項
掘立柱建物、土壇など		土師器・須恵器・古瓦		推定正殿検出

国衙跡保存整備基礎調査
概要報告書Ⅲ

寺崎遺跡第7次調査

1999年3月31日

発行 宮崎県教育委員会
〒880-0805 宮崎県橋通1丁目9番10号

印刷 有限会社富士写真印刷
〒880-0212 宮崎県佐土原町下郷河
電話 0985(74)2179